

表一1 震源断層評価に関する検討結果一覧表

項目	対象	検討内容
<p>①P波探査結果等を踏まえた京都府南部の断層の評価 (図一1 京都府南部の地下構造に関する主な調査結果参照)</p>	<p>・黄檗断層</p>	<p>・今回実施した反射法探査A測線の結果城陽リニアメントの位置に顕著な構造は認められなかった。 ・黄檗断層による変動地形の南端は宇治川までであり、南岸には延長しないと考えられる。</p>
	<p>・井手断層</p>	<p>・井手断層の変動地形は断続的である。Ma1の変位に代表される古いテクトニクス活動が新しいテクトニクスに転換するとともに撓曲が前面に出てきているのではないか。 ・一連の変動地形の北端は、城陽市の南部であり、変動地形の南端は、木津川南岸のJR木津駅南東付近まで追跡できる。</p>
	<p>・京阪奈丘陵断層帯</p>	<p>・京阪奈丘陵の撓曲群の特徴は雁行状の配列である。これら雁行配列した撓曲群の活動は古いものであり、低位段丘を切ったところが無い。 ・今回実施した反射法探査B測線の結果、撓曲群の北端の一部はB測線の北側まで延びていることが確認された。 ・震源断層として、その活動性を考慮に入れるならプライオリティは低いと考えられる。</p>
<p>②震度予測を行う震源断層の設定 (図一2 京都府地域地質概要図参照)</p>	<p>・男山東側の断層</p>	<p>・男山東側の断層は反射断面から見る限り活動性が高いと思われる。 ・三川合流点の御幸橋の西では京都大学今住・小林により東落ちの落差約400mの断層が推定されており、金が原断層の南の延長である可能性があるとされている。 また淀川南岸への延長も示唆されており、金が原断層と男山東側の断層の連続性について検討の余地がある。 ・男山東側の断層の南端は産総研の八幡第2測線の南東側までは延びていることが確認できるが、その先は不明である。</p>
	<p>・交野断層</p>	<p>・大大特の反射法探査の解釈断面によると交野断層の落差は大きく、京都府南部域は逆断層の上盤側にあり、この断層が動けば京都府域の被害が大きくなる可能性がある。 ・交野断層の落差・断面傾斜に関して根拠となっている大大特の反射断面解釈図は浅い、部分の分解能に問題があり、信頼性にやや疑問があり検討の余地がある。</p>
	<p>・その他</p>	<p>・京都盆地南部域のテクトニクスは巨椋池を中心とした部分と基盤岩露頭のあがる飯岡より南側の木津川低地では異なる活動性が見られ、前者は現在まで沈降域にあるのに反して後者は現在では侵食域にあると思われる。 これは木津川低地域では沖積層の発達が悪いことに特徴的に示される。</p>
<p>②震度予測を行う震源断層の設定 (図一2 京都府地域地質概要図参照)</p>	<p>京都府中部・北部</p>	<p>・京都府中部・北部において、活断層分布に見落としがないか、また既に指摘されている活断層やリニアメントについて震源断層となる可能性はどうか、検討の必要がある。 ・「近畿の活断層」では、赤線:活断層又は推定活断層 黒実線:連続性に富むシャープなリニアメント 黒破線: 主なリニアメント、 とランク別に記載されている。 ・「近畿の活断層」における断層・リニアメントの記載は見落としのないよう、疑わしいものを含め網羅的に行うという基本方針で作成された。この意味から少なくとも地形に表れているもの見落としは無いと考えられる。 ・「近畿の活断層」における黒破線で示されるリニアメントは、活断層の可能性は極めて低く震源断層としては無視しうる。 ・由良川流域の遺跡調査から発見された液状化痕跡は京都府南部に比較して、非常に少ない。 ・上林川断層は横ずれ主体であるが、変位地形のシャープさは弱い。</p>